

スポーツ健康学研究科

I 2019年度 大学評価委員会の評価結果への対応

【2019年度大学評価結果総評】（参考）

スポーツ健康学研究科は2016年度に開設され、定員の充足率は安定しており2018年度には8名の修了生を輩出している。学位授与方針において、教養・知識の習得とともに、高度専門的職業人の養成という理念・目的をかかげ、コースワークとしては、オムニバスで研究スキルを学ぶ「研究デザイン・フィロソフィー」や基礎科目である「スポーツ健康学特論Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ」、展開科目として各院生の進路に合わせて選ぶスポーツコーチング科目群、ヘルスプロモーション科目群、スポーツマネジメント科目群の科目がある。リサーチワークとしては研究指導科目「スポーツ健康学演習Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ、Ⅳ」があり、修士論文作成に取り組みながら、全教員参加を原則とする構想発表会、計画発表会、中間発表会、最終発表会の4回の修士論文発表の機会が設けられている。以上のようにコースワークとリサーチワークが適切に組み合わせられ、教育が行われていると評価できる。

また学習成果を把握し、学位の水準を保つための取り組みとしては、指導教員による日々の指導に加えて、上記の段階的な成果発表会が効果的に実施されている。学位授与に係る責任体制は、入学当初から主指導教員および副指導教員が継続的に論文作成指導にあたり、修士論文は1名の主査と2名の副査による査読と口頭試問の後に教授会が審査を行い、その授与は適切に行われている。

教育課程、学習成果、教育方法の検証、見直しを行い、2021年度以降の新カリキュラムの導入を中期目標として掲げていることは評価できる。また、最も重視する年度目標として博士後期課程設置を進めるための体制と進め方が掲げられているが、着実に検討が進むことを期待するとともに、博士後期課程設置の取り組みの相乗効果として研究活動の活性化に繋がることも期待したい。

FD活動については、2019年度に研究科教授会において「アクティブラーニング講習会」の実施が予定されているが、今後も継続的に組織的FD活動に取り組むことが望まれる。

【2019年度大学評価委員会の評価結果への対応状況】

2019年度の修了生に対するアンケート（修了生12名のうち11名を対象、2020年2月実施）の結果では、学習成果としての「専門的知識とその応用力」、「論文執筆・完成能力」、「研究課題を発見し、自力で調査、研究する能力」、「口頭発表能力」等でかなり肯定的な回答が得られた。これらのうち、「口頭発表能力」（本研究科：90.9%＞2018年度大学院全体：71.9%）については、全教員参加を原則とするコースワークの下、2年間で計4回の修論発表会を開催している成果を学生が実感しているものと捉えられる。また、「専門的知識とその応用力」に対する肯定的回答は90.9%であり（2018年度・大学院全体の結果は90.2%）、本研究科における前年度（71.4%）よりもかなり向上し、「論文執筆・完成能力」に対する肯定的回答は81.8%であり（2018年度・大学院全体の結果は81.0%）、本研究科における前年度（57.1%）よりも大幅に向上した。この要因として、修士論文の「事前提出（予備的審査）」において副指導教員による論文チェックを行う等、2019年度から副指導教員の指導役割を強化した点を挙げることができる。

2021年度の新カリキュラム導入へ向けて、2020年度は現行カリキュラムに対する検討を十分に行い、学習成果をより高めるための教育課程を創造していく所存である。

重点目標とした博士後期課程設置へ向けて、2019年度秋に「設置準備委員会」を立ち上げ、その後、大学執行部・事務部の多大なる支援のもと、2020年3月に設置申請書を文部科学省へ提出することができた。2020年度4月現在、設置審査の第1次結果を待っている状況である。

FD活動については、2019年度に「アクティブラーニング講習会」を実施し、今後も質保証委員会の機能を高め、継続的に組織的FD活動に取り組む所存である。

【2019年度大学評価委員会の評価結果への対応状況の評価】

スポーツ健康学研究科は2016年度の設置から5年目を迎え、2021年度の博士後期課程設置に向けて準備を進めており概ね順調に推移している。「2019年度大学評価結果総評」において、「博士後期課程設置の取り組みの相乗効果として研究活動の活性化に繋がることも期待したい」と指摘されていたが、2019年度の修了生に対するアンケートでは、学習成果全般において肯定的回答が多く、「口頭発表能力」は大学院全体をかなり上回り、「専門知識とその応用力」では昨年度と比較し相当程度増加したことは評価できる。特に「論文執筆・完成能力」に対する肯定的回答は、2018年度は57.1%であったが2019年度は81.8%と大幅に向上している。相対的に少ない学生数とはいえ、修士論文チェックなど副指導員の指導的役割を強化したことの結果であり特筆に値する。

II 自己点検・評価

1 教育課程・学習成果

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S:さらに改善した、A:従来通り、B:改善していない」を意味する。

【2020年5月時点の点検・評価】

(1) 点検・評価項目における現状

1.1 教育課程の編成・実施方針に基づき、各学位課程にふさわしい授業科目を開設し、教育課程を体系的に編成しているか。	
①修士課程においてコースワーク、リサーチワークを適切に組み合わせ、教育を行っていますか。	S <input checked="" type="checkbox"/> A B
<p>※コースワーク、リサーチワークを組み合わせた教育課程の概要を記入。</p> <p>必修科目の「研究デザイン・フィロソフィー」は、全専任教員によるオムニバス方式で開講され、研究倫理諸問題から学会発表や論文投稿までの研究のあり方、また、データ統計のスキル等を幅広く学修できる。「スポーツ健康学特論Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ」はスポーツ健康学を成立させている心身科学、自然科学、人文社会科学の視点から各々の特性について学修できる。これらを基礎として、スポーツコーチング科目群、ヘルスプロモーション科目群、スポーツマネジメント科目群から個々の専門性を追求するための知識を獲得することができる。また、研究指導科目の「スポーツ健康学演習Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ、Ⅳ」によって修士論文作成に取り組みながら、複数回の段階的な成果発表会を全教員参加のもとで実施し、コースワークとしての学習成果をあげることができるようになっている。</p> <p>【2019年度に改善された事項及び新規取り組み事項等】※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。 特になし</p> <p>【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。 ・『2020年度 大学院要項 スポーツ健康学研究科』（pp.15-16）</p>	
②博士後期課程において授業科目を単位化し、修了要件としていますか。	はい いいえ
<p>【根拠資料】※「はい」を選択した場合に単位化及び修了要件として設定されていることが確認できる資料を記入。 ・該当しない（修士課程のみ）</p>	
③博士後期課程においてコースワーク、リサーチワークを適切に組み合わせ、教育を行っていますか。	S A B
<p>※コースワーク、リサーチワークを組み合わせた教育課程の概要を記入。 ・該当しない（修士課程のみ）</p> <p>【2019年度に改善された事項及び新規取り組み事項等】※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。</p> <p>【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。</p>	
④専門分野の高度化に対応した教育内容を提供していますか。	S <input checked="" type="checkbox"/> A B
<p>※学生に提供されている専門分野の高度化に対応した教育に関し、どのような教育内容が提供されているか概要を記入。</p> <p>【修士】 展開科目において、基礎科目で修得した知識を土台にして、修了後の職業を見据えたより専門的な学びへ発展させることを目的とした教育内容を提供している。その構成は、スポーツ・健康に関わる理論的知識を修得させる特論科目と、重要な課題に対し実践的な対応能力を身につけさせる演習科目から構成される。なお、展開科目では「スポーツ健康学」の多様性に鑑み、科目群ごとの履修条件は設けませんが、職業の分野ごとに履修モデルを提示し、学生はこれに準拠して展開科目を履修することで、修了後の進路に適した学びを修めることができるようにしている。</p> <p>【博士】 該当しない（修士課程のみ）</p> <p>【2019年度に改善された事項及び新規取り組み事項等】※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。</p> <p>【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。 ・『2020年度 大学院要項 スポーツ健康学研究科』（pp.15-16）</p>	
⑤大学院教育のグローバル化推進のための取り組みをしていますか。	S <input checked="" type="checkbox"/> A B
<p>※大学院教育のグローバル化推進のために行っている取り組みの概要を記入。</p> <p>【修士】</p>	

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S:さらに改善した、A:従来通り、B:改善していない」を意味する。

2019年度は3名の学生が海外において学会発表を行い、本学の海外研究活動補助の助成金を受けた。また、大学院生1名がスポーツ健康学部の海外研修プログラム（コーチング領域）に参加し、学部生をリードするとともに海外の大学およびスポーツクラブ等と連携を深めた。

【博士】

該当しない（修士課程のみ）

【2019年度に改善された事項及び新規取り組み事項等】 ※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。

特になし

【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。

- ・2019年度学会等補助費資料（スポーツ健康学部事務課）

1.2 学生の学習を活性化し、効果的に教育を行うための様々な措置を講じているか。

①学生の履修指導を適切に行っていますか。

S A B

※履修指導の体制および方法を記入。

【修士】

新型コロナウイルスの影響により、特に新入生はオリエンテーションを対面で行うことができず、紙媒体により『2020年度 大学院要項 スポーツ健康学研究科（第7章 履修について）』を読むに止まっている。その他、グーグルアンケートによる質問等に対して適宜回答している。

【博士】

該当しない（修士課程のみ）

【2019年度に改善された事項及び新規取り組み事項等】 ※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。

特になし

【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。

- ・『2020年度 大学院要項 スポーツ健康学研究科』（pp.22-23）

②研究科（専攻）として研究指導計画を書面で作成し、あらかじめ学生が知ることのできる状態にしていますか。

はい いいえ

※ここでいう「研究指導計画」とは、事務手続きのスケジュールやシラバス等の個別教員の指導計画を指すのではなく、研究科としての研究指導體制及び研究指導スケジュールをまとめたものを指します（学位取得までのロードマップの明示等）。また、「あらかじめ学生が知ることの状態」とは、HPや要項への掲載、ガイダンスでの配布等が考えられます。

【修士】

『2020年度 大学院要項 スポーツ健康学研究科』（p.27）において、「修士論文審査スケジュール」を記載している。

【博士】

該当しない（修士課程のみ）

【根拠資料】 ※研究指導計画が掲載された文書・冊子等の名称を記入。

- ・『2020年度 大学院要項 スポーツ健康学研究科』（p.27）

③研究指導計画に基づく研究指導、学位論文指導を行っていますか。

はい いいえ

※組織的な研究指導、学位論文指導の概要を記入。

【修士】

研究指導計画に基づき、2年間で4回の修士論文成果発表会を全教員の参加を原則とする中で実施し、全教員による評価・コメントを学生にフィードバックする。また、修士論文作成に際して主指導教員だけでなく副指導教員も随時チェックを行う体制をとる。

【博士】

該当しない（修士課程のみ）

【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。

- ・発表会評価シート（4枚）

1.3 成績評価、単位認定及び学位授与を適切に行っているか。

①成績評価と単位認定の適切性を確認していますか。

S A B

※成績評価と単位認定の確認体制及び方法を記入。

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S:さらに改善した、A:従来通り、B:改善していない」を意味する。

<p>【修士】 修士論文の成績評価については全教員の合議により確認している。個々の授業単位認定の適切性は検討していないが、単位未修得による留年者はこれまでにいない（ただし、休学者は存在する）。</p>	
<p>【博士】 該当しない（修士課程のみ）</p>	
<p>【2019年度に改善された事項及び新規取り組み事項等】 ※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。 特になし</p>	
<p>【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。 ・特になし</p>	
<p>②学位論文審査基準を明らかにし、あらかじめ学生が知ることのできる状態にしていますか。</p>	<p>はい <input type="checkbox"/> いいえ <input type="checkbox"/></p>
<p>※学位論文審査基準の名称及び明示方法を記入。 【修士】 『2020年度 大学院要項 スポーツ健康学研究科』において「修士論文審査基準」を明示している。 【博士】 該当しない（修士課程のみ）</p>	
<p>【根拠資料】 ※学位論文審査基準にあたる文書の名称を記入。また、冊子等に掲載し公表している場合にはその名称を記入。 ・『2020年度 大学院要項 スポーツ健康学研究科』（p. 30）</p>	
<p>③学位授与状況（学位授与者数・学位授与率・学位取得までの年限等）を把握していますか。</p>	<p>はい <input type="checkbox"/> いいえ <input type="checkbox"/></p>
<p>※簡条書きで記入※データの把握主体・把握方法、データの種類等を記入。 スポーツ健康学部事務課に保管。 【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。 ・特になし</p>	
<p>④学位の水準を保つための取り組みを行っていますか。</p>	<p>S <input checked="" type="checkbox"/> A <input type="checkbox"/> B <input type="checkbox"/></p>
<p>※取り組み概要を記入。 【修士】 指導教員による日々の指導に加えて、全教員参加を原則とする構想発表会、計画発表会、中間発表会、最終発表会の4回の修士論文発表の機会があり、指導教員以外の教員や他の大学院生等からの質問や助言を受けることにより水準が保たれるようにしている。また、副指導教員が修士論文提出前に論文内容をチェックし、主指導教員と意見交換するようにしている。 【博士】 該当しない（修士課程のみ）</p>	
<p>【2019年度に改善された事項及び新規取り組み事項等】 ※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。 特になし</p>	
<p>【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。 ・『2020年度 大学院要項 スポーツ健康学研究科』、発表会評価シート（4枚）</p>	
<p>⑤学位授与に係る責任体制及び手続を明らかにし、適切な学位の授与が行われていますか。</p>	<p>S <input checked="" type="checkbox"/> A <input type="checkbox"/> B <input type="checkbox"/></p>
<p>※責任体制及び手続等の概要を記入。ただし、博士については、学位規則のとおりに行われている場合には概要の記入は不要とし、「学位規則のとおり」と記入。 【修士】 入学当初から主指導教員および副指導教員（各1名）が継続的に論文作成指導にあたる。修士論文提出後は、教授会において決定した修士論文審査委員（1名の主査と2名の副査）が修士論文を査読した後、口頭試問を行う。その評価を踏まえ、教授会において最終的な合否・評価を判定する。 【博士】 該当しない（修士課程のみ）</p>	
<p>【2019年度に改善された事項及び新規取り組み事項等】 ※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。 特になし</p>	
<p>【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。 ・『2020年度 大学院要項 スポーツ健康学研究科』（p. 27）</p>	

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S:さらに改善した、A:従来通り、B:改善していない」を意味する。

⑥学生の就職・進学状況を研究科（専攻）単位で把握していますか。	はい <input type="checkbox"/> いいえ <input type="checkbox"/>
<p>※データの把握主体・把握方法、データの種類等を記入。 スポーツ健康学部事務課においてデータを保管。</p>	
<p>【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。 ・修了生カード（大学評価室で保管）</p>	
1.4 学位授与方針に明示した学生の学習成果を適切に把握及び評価しているか。	
①分野の特性に応じた学習成果を測定するための指標の適切な設定または取り組みが行われていますか。	S <input checked="" type="checkbox"/> A <input type="checkbox"/> B <input type="checkbox"/>
<p>※取り組みの概要を記入。</p>	
<p>【修士】 全教員参加を原則とする構想発表会、計画発表会、中間発表会、最終発表会の4回の修士論文発表会において、学位授与方針の観点から学習成果を把握している。また、修士論文審査では各審査委員が学位授与方針に則った観点から評価している。</p>	
<p>【博士】 該当しない（修士課程のみ）</p>	
<p>【2019年度に改善された事項及び新規取り組み事項等】 ※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。 特になし</p>	
<p>【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。 ・発表会評価シート（4枚）</p>	
②具体的な学習成果を把握・評価するための方法を導入または取り組みが行われていますか。	S <input checked="" type="checkbox"/> A <input type="checkbox"/> B <input type="checkbox"/>
<p>※取り組みの概要を記入。取り組み例：アセスメント・テスト、ルーブリックを活用した測定、学習成果の測定を目的とした学生調査、卒業生・就職先への意見聴取、習熟度達成テストや大学評価室卒業生アンケートの活用状況等。</p>	
<p>【修士】 修了生アンケート（2019年度修了者12名のうち11名対象、2020年2月実施）の結果では、学習成果としての「専門的知識とその応用力」に対する肯定的回答は90.9%であり（2018年度・大学院全体の結果は90.2%）、本研究科における前年度（71.4%）よりも向上した。また、「論文執筆・完成能力」に対する肯定的回答は81.8%であり（2018年度・大学院全体の結果は81.0%）、本研究科における前年度（57.1%）よりもかなり向上した。また、「英語能力」（本研究科：66.7%>大学院全体：40.5%）、「研究課題を発見し、自力で調査、研究する能力」（本研究科：90.9%>大学院全体：86.7%）、「口頭発表能力」（本研究科：90.9%>大学院全体：71.9%）において本研究科は大学院全体を上回り、「幅広い知識と教養」（本研究科：80.0%<大学院全体：83.3%）、「その他の外国語能力」（本研究科：25.0%<全体32.4%）は下回った。前年に引き続いて「口頭発表能力」が高評価である点については本研究科では2年間で計4回の修論発表会を催している成果を学生が実感しているものと捉えられる。</p>	
<p>【博士】 該当しない（修士課程のみ）</p>	
<p>【2019年度に改善された事項及び新規取り組み事項等】 ※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。 特になし</p>	
<p>【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。 ・修了生アンケート（教育支援課で取りまとめたうえで作成）</p>	
1.5 教育課程及びその内容、方法の適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。	
①学習成果を定期的に検証し、その結果をもとに教育課程及びその内容、方法の改善・向上に向けた取り組みを行っていますか。	S <input checked="" type="checkbox"/> A <input type="checkbox"/> B <input type="checkbox"/>
<p>※検証体制および方法、改善・向上に向けた取り組みの概要を記入。</p>	
<p>【修士】 修了生アンケートの結果を研究科教授会において報告し、専任教員で共有した。その中で、より専門性を高めるための教育課程のあり方についても継続的に検討し、2021年度の新カリキュラム編成へ向けて活かしていく。</p>	
<p>【博士】 該当しない（修士課程のみ）</p>	

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S:さらに改善した、A:従来通り、B:改善していない」を意味する。

<p>【2019年度に改善された事項及び新規取り組み事項等】 ※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。</p> <p>特になし</p>	
<p>【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。</p> <p>・特になし</p>	
<p>②学生による授業改善アンケート結果を組織的に利用していますか。</p>	S A B
<p>※取り組みの概要を記入。</p> <p>2018年度は21科目において授業改善アンケートを実施したが、2019年度は25科目開講中、アンケート実施は8科目に止まった。組織的な体制として学生へ授業改善アンケートの回答を促す必要がある。</p>	
<p>【2019年度に改善された事項及び新規取り組み事項等】 ※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。</p> <p>特になし</p>	
<p>【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。</p> <p>・特になし</p>	

(2) 長所・特色

内容	点検・評価項目
<p>修士論文作成について、コースワークとして全教員参加を原則とした構想発表会、計画発表会、中間発表会、最終発表会の計4回の段階的な発表の機会を設け、学位の水準が保たれるようにしている。さらに2019年度は、修士論文最終提出の約1ヶ月前に主・副指導教員へ修士論文初稿を提出し、必ず論文内容のチェックを受けることとしたため、「論文執筆能力」についても高まったと学生は感じた。2020年度も論文の質が一定水準に保たれることを目標とする。</p>	1.1① 1.4②

(3) 問題点

内容	点検・評価項目
<p>2019年度のカリキュラムについて、より深い専門性の追求を望む声が学生から聞かれた。2021年度の新カリキュラム策定へ向けて、2020年度は十分な検討を行う必要がある。一方で、修士課程では「専門的職業人養成」を目標に掲げており、「幅広い知識・教養の修得」という点も蔑ろにはできない。より高度な専門性の追求については2021年度開設予定の博士後期課程によって実現できる面もあるため、設置認可が望まれるところである。</p>	1.1④

【この基準の大学評価】

<p>スポーツ健康学研究科の「点検・評価項目における現状」としては、コースワークとリサーチワークが適切に組み合わせられている。2019年度は3名の学生が海外学会発表をするなど、グローバル化推進に寄与する取り組みも実施されている。2年間で4回の修士論文成果発表会が全教員の参加を原則とする中で実施され、研究指導も重視されており評価できる。学生一人あたりに十分な発表時間が確保されるよう期待したい。修士論文の成績評価も全教員の合議により確認されており、学位水準維持の取り組み、学位授与に係る責任体制および手続きも妥当なものである。具体的な学習成果の把握は修了者アンケートによって行われている。授業改善アンケートの実施は、25科目開講中8科目で実施された。</p> <p>自己点検における「長所・特色」として、2019年度に修士論文最終提出の約1ヶ月前に主・副指導教員による論文内容のチェックを受ける体制がとられたことは評価できる。一方、「問題点」としてより深い専門性の追求と「幅広い知識・教養の修得」の両立の困難さがあげられている。</p>
--

2 教員・教員組織

【2020年5月時点の点検・評価】

(1) 点検・評価項目における現状

<p>2.1 教員の資質の向上を図るための方策を組織的かつ多面的に実施し、教員及び教員組織の改善につなげているか。</p>	
<p>①研究科（専攻）独自のFD活動は適切に行われていますか。</p>	S A B
<p>【FD活動を行なうための体制】 ※箇条書きで記入。</p>	

※注1 回答欄「はいいいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S:さらに改善した、A:従来通り、B:改善していない」を意味する。

他学部の所属教員であり本研究科の授業担当でもある教員をメンバーとした質保証委員会を設けて定期的に意見交換を行い、内部と外部の視点によるFD活動を実施している。

【2019年度のFD活動の実績（開催日、場所、テーマ、内容（概要）、参加人数等）】 ※箇条書きで記入。

・2019年7月23日にアクティブラーニングに詳しい他学部の教員を招き、研修会を実施した。アクティブラーニングの具体的な方法について各教員の認識を深めることができた。参加者は13名。

【2019年度に改善された事項及び新規取り組み事項等】 ※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。

特になし

【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。

・特になし

②研究活動や社会貢献等の諸活動の活性化や資質向上を図るための方策を講じていますか。	S	A	B
---	---	----------	---

※取り組みの概要を記入。

研究活動については、2021年度開設予定の博士後期課程設置へ向けて、各教員は研究業績を高める必要を認識している。

【2019年度に改善された事項及び新規取り組み事項等】 ※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。

特になし

【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。

・特になし

(2) 長所・特色

内容	点検・評価項目
2021年度開設予定の博士後期課程設置の準備に伴い、教員組織として研究科のあり方・理念・方向性に関する意識が高まっていると思われる。教員個人の研究面でも、2019年度において研究科内部の修士課程担当資格審査基準にもとづき、研究科担当教員の全員（16名）が「研究指導」あるいは「研究指導補助」の資格を有するに至った。 また、教育面では、現行の修士課程におけるカリキュラムのあり方、学位水準の担保の方法、コースワークの行い方等について教授会で継続的に検討している。	2.1①

(3) 問題点

内容	点検・評価項目
・特になし	

【この基準の大学評価】

<p>スポーツ健康学研究科の授業を担当する他学部の所属教員をメンバーとした質保証委員会が設けられ、内部と外部の視点によるFD活動が実施されていることは評価できる。自己点検における「長所・特色」としては、博士後期課程設置の準備に伴い、教員組織として研究科のあり方・理念・方向性に関する意識の高まりが指摘されている。研究科担当教員の全員が、研究科内部の修士課程担当資格審査基準にもとづき「研究指導」あるいは「研究指導補助」の資格を有するに至ったことは評価できる。</p>

III 2019年度中期目標・年度目標達成状況報告書

No	評価基準	理念・目的							
1	中期目標	変更なし。引き続き、「高度専門的職業人の養成」を掲げる。							
	年度目標	—							
	達成指標	—							
	年度末報告	<table border="1"> <thead> <tr> <th colspan="2">教授会執行部による点検・評価</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>自己評価</td> <td>—</td> </tr> <tr> <td>理由</td> <td>—</td> </tr> <tr> <td>改善策</td> <td>—</td> </tr> </tbody> </table>	教授会執行部による点検・評価		自己評価	—	理由	—	改善策
教授会執行部による点検・評価									
自己評価	—								
理由	—								
改善策	—								

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S:さらに改善した、A:従来通り、B:改善していない」を意味する。

		質保証委員会による点検・評価	
		所見	－
		改善のための提言	－
No	評価基準	内部質保証	
2	中期目標	教育課程・学習成果、教員組織等を継続的に点検するため、質保証委員会を機能させる。	
	年度目標	博士課程設置を進めるため、研究科内のワーキンググループおよび質保証委員会を機能させる。	
	達成指標	質保証委員を含んだ検討会を年間に複数回開催する。	
		教授会執行部による点検・評価	
		自己評価	A
		理由	博士課程設置へ向けて、修士課程の内部質保証委員と博士課程 WG を兼担している他学部所属教員と定期的に意見交換を行い、継続的に検討を進めることができた。
		改善策	教育課程・学習成果、教員組織等を全体的に点検するためには、さらに質保証委員会を機能する必要がある。
		質保証委員会による点検・評価	
		所見	博士課程設置に向けて質保証委員と博士課程 WG との定期的な意見交換が実施されていることから、目標がほぼ達成できたとの評価は妥当であると考えられる。
		改善のための提言	博士課程設置に加え、教育課程・学習成果、教員組織等についても、質保証委員を交えた定期的な意見交換の実施を期待する。
No	評価基準	教育課程・学習成果【教育課程・教育内容に関すること】	
3	中期目標	「高度専門的職業人の養成」という理念・目的に対応する教育内容であるかについて検証し、新カリキュラム策定（2021年度以降）を目指す。	
	年度目標	教育課程・教育内容について教員の意見交換を定期的に行うとともに、2018年度に引き続き「授業改善アンケート」をもとに改善点を探る。	
	達成指標	全授業科目（スポーツ健康学演習を除く）について「授業改善アンケート」を行う。	
		教授会執行部による点検・評価	
		自己評価	B
		理由	2018年度は21科目において授業改善アンケートを実施したが、2019年度は25科目開講中、アンケート実施は8科目に止まった。8科目（延べ14名）のアンケート結果は、「この授業では積極的な工夫がなされていたか」については平均4.9（5段階評定：2018年度は4.4）、「どれくらいの授業外学習をしたか」については平均3.9時間（2018年度は2.4時間）、「この授業を理解できたか」については平均4.9（5段階評定：2018年度は4.2）、「この授業を履修してよかったか」については平均4.9（5段階評定：2018年度は4.4）であり、回答対象となった8科目については、数値的に昨年度を上回っており良好であると捉えられる。
		改善策	組織的な体制として学生へ授業改善アンケートの回答を促す必要がある。授業改善アンケート実施率が低かったため教育内容に対する満足度の全体像はつかめないが、一方で、修了生アンケート（2019年度修了者のうち11名対象、2020年2月実施）の結果では、「カリキュラム全般」の満足度に対する肯定的回答（満足＋やや満足）は60.0%であり、2018年度・大学院全体の結果（79.7%）を下回った。また、同じ修了生アンケートにおける「専門講義科目の教育内容」の満足度に対する肯定的回答は54.5%であり、2018年度・大学院全体の結果（82.4%）を同様に下回った。これらのことから、より専門性の高い教育内容を盛り込んだカリキュラム見直しの必要性がうかがえる。
		質保証委員会による点検・評価	
		所見	スポーツ健康学演習を除く全25科目について「授業改善アンケート」を行うという目標を掲げたにもかかわらず、その実施が8科目に止まったため教育内容の全体像を把握できな

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S:さらに改善した、A:従来通り、B:改善していない」を意味する。

			かったことは残念である。一方で、回答を得た8科目において昨年度を上回る結果が示されたことは評価できる。	
	改善のための提言		授業改善アンケートの実施率向上が課題となる。今後は新カリキュラム策定を念頭に置きつつ、全科目における授業改善アンケートの実施によって教育内容に関する全体像および改善点の把握に努める必要がある。	
No	評価基準	教育課程・学習成果【教育方法に関すること】		
4	中期目標	①「高度専門的職業人の養成」という理念・目的に対応する教育方法であるかについて検証し、新カリキュラム策定（教職再課程認定のため2021年度以降）を目指す。		
	年度目標	教育方法について教員の意見交換を定期的に行うとともに、2018年度に引き続き「授業改善アンケート」をもとに改善点を探る。		
	達成指標	全授業科目（スポーツ健康学演習を除く）について「授業改善アンケート」を行う。		
	年度末報告	教授会執行部による点検・評価		
		自己評価	B	
		理由	上記のように、2019年度における「授業改善アンケート」で回答のあった科目は開講科目25科目中8科目と約3分の1に止まったため、教育方法についても具体的な全体像はつかめない。一方で、回答のあった8科目についてはいずれの項目においても数値的に2018年度を上回る結果であった。	
		改善策	修了生アンケート（2019年度修了者のうち11名対象、2020年2月実施）の結果では、「修士論文の指導」の満足度に対する肯定的回答は100.0%であり（2018年度・大学院全体の結果は87.6%）、また、「教員の指導力」についての肯定的回答も100.0%である（2018年度・大学院全体の結果は89.4%）。これらから、本研究科の専門に関わる個別の指導力や指導方法については学生の満足度の高さがうかがえるが、上述のように、授業科目の設定をはじめとするカリキュラムについては専門性を強める必要があると考えられる。	
		質保証委員会による点検・評価		
		所見	アンケートを実施した8科目において前年度を上回る結果を得たことは評価できるものの、アンケート実施率が前年度を大きく下回ったため、教育方法の具体的な全体像を把握できなかったことは残念である。	
	改善のための提言	上述と同じく、今後は全科目における授業改善アンケートの実施が期待される。また、アンケート結果から得られた改善点を踏まえつつ、新カリキュラムについて検討する必要がある。		
No	評価基準	教育課程・学習成果【教育方法に関すること】		
5	中期目標	②アクティブラーニング等、学生の積極的な参加型授業を充実する。		
	年度目標	アクティブラーニング等の方法を検討し、2018年度に引き続き、参加型授業の実施を促進する。		
	達成指標	アクティブラーニングに関する研修会を開催する。		
	年度末報告	教授会執行部による点検・評価		
		自己評価	S	
		理由	アクティブラーニングの具体的な方法について、2019年7月23日にアクティブラーニングに詳しい他学部の教員を招き、研修会を実施した。アクティブラーニングの具体的な方法について各教員の認識を深めることができた。	
		改善策	-	
		質保証委員会による点検・評価		
		所見	前年度の改善案で示したアクティブラーニングに詳しい他学部教員による研修会を実施したことは評価できる。	
	改善のための提言	継続的に研修会を実施することにより、各教員が学生参加型授業の具体的な実践方法について認識を深めてほしい。		
No	評価基準	教育課程・学習成果【学習成果に関すること】		

※注1 回答欄「はいいいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S:さらに改善した、A:従来通り、B:改善していない」を意味する。

6	中期目標	「高度専門的職業人の養成」という理念・目的を達成する学習成果となっているかを検証するための方法を設定する。	
	年度目標	大学評価室による大学院修了生アンケートを用いて本研究科の2019年度修了生に対する調査を行う。	
	達成指標	2018年度の結果と照合して変化等をみる。特に2018年度において結果が芳しくなかった「専門的知識とその応用力」「論文執筆・完成能力」に着目する。	
	年度末報告	教授会執行部による点検・評価	
		自己評価	S
		理由	修了生アンケート（2019年度修了者のうち11名対象、2020年2月実施）の結果では、学習成果としての「専門的知識とその応用力」に対する肯定的回答は90.9%であり（2018年度・大学院全体の結果は90.2%）、本研究科における前年度（71.4%）よりも向上した。また、「論文執筆・完成能力」に対する肯定的回答は81.8%であり（2018年度・大学院全体の結果は81.0%）、本研究科における前年度（57.1%）よりもかなり向上した。また、「英語能力」（本研究科：66.7%>大学院全体：40.5%）、「研究課題を発見し、自力で調査、研究する能力」（本研究科：90.9%>大学院全体：86.7%）、「口頭発表能力」（本研究科：90.9%>大学院全体：71.9%）において本研究科は大学院全体を上回り、「幅広い知識と教養」（本研究科：80.0%<大学院全体：83.3%）、「その他の外国語能力」（本研究科：25.0%<全体32.4%）は下回った。前年に引き続いて「口頭発表能力」が高い点については本研究科では2年間で計4回の修論発表会を催していることによる成果を学生が実感しているものと捉えられる。
		改善策	「論文執筆・完成能力」に対する評価が大幅に向上した理由として、今年度から実施した修士論文の「事前提出（予備的審査）」において副指導教員による論文チェックを行った点を挙げることができる。また、「専門的知識とその応用力」に対する評価も前年度よりも向上したが、上述のように「教育内容」「教育方法」の観点からさらにカリキュラム改編等の策を講じる必要があると考えられる。
		質保証委員会による点検・評価	
	所見	目標に掲げていた大学院修了生アンケートを実施するに留まらず、前年度の結果と比較することを通して、本年度の反省を行うとともに、次年度の課題を検討していると点で大いに評価できる。	
	改善のための提言	引き続き、本年度の成果に影響を及ぼしたとされる「修論発表会」を活用しながら、指導教員のみ限定されない複数教員による包括的な支援の提供を強化するなど、各学生のニーズや課題に即した、きめ細かい指導体制を強化することで、さらなる成果の獲得と「幅広い知識と教養」をはじめとする諸課題の改善が期待される。	
No	評価基準	学生の受け入れ	
7	中期目標	着実に入学定員を確保していく。	
	年度目標	2020年度入試（2019年度実施）へ向けて広報活動を行い、定員確保を目指す。	
	達成指標	定員10名を満たす。	
	年度末報告	教授会執行部による点検・評価	
		自己評価	A
		理由	2020年度入試（2019年度実施）における合格・入学手続き者は計11名となり、定員10名を満たした。内訳は、学内選抜入試において6名申込み・受験、6名合格、6名手続（その後、1名辞退により5名）。秋季一般入試1名申込み・受験、合格者無。春季一般入試9名申込み・8名受験、6名合格、6名手続。
		改善策	定員10名に対して、学内選抜入試における志願者数は半数を超える6名ありまらずといえるが、秋季一般入試の志願者数が1名であり、春季一般入試の志願者数9名に対してアンバランスとなった。秋季一般入試について学外に対する宣伝活動を強める必要があると思われる。
質保証委員会による点検・評価			

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S:さらに改善した、A:従来通り、B:改善していない」を意味する。

		所見	年度目標に掲げられていた定員数を充足しており、当初の目標を達成したと評価できる。
		改善のための提言	研究科の価値を高めるにおいては、今後も学内のみならず、学外にも目を向け、積極的に広報活動を行う必要があると思われる。本点について、博士課程の開設と関連づけ、検討を重ねていくことが望まれる。
No		評価基準	教員・教員組織
8	年度末報告	中期目標	①現行の修士課程（2016年度開設）において、さらに教育研究指導体制を充実する。
		年度目標	修士論文作成のプロセスにおける副指導教員の役割の明確化。
		達成指標	修士論文の提出前に副指導教員が論文チェックを行ったか。
		教授会執行部による点検・評価	
		自己評価	A
		理由	2019年度から修士論文提出（1月初旬）よりも約1か月前に主・副指導教員へ論文を提出し、チェックを受けることとした（ただし、評価はしない）。
		改善策	主・副指導教員による事前の修論チェックにより、結果的に大きな欠陥のある論文は減少したといえるが、事前の提出論文に対しては「評価しない」ため、提出時の完成度には学生個人による差があった。そこで、事前提出時が「ほぼ完成された論文の提出」となるように、例えば論文様式については「チェックリスト」の提出を課す等が考えられる。
		質保証委員会による点検・評価	
所見	年度目標に掲げられていた「副指導教員の役割の明確化」に当たり、副指導教員が論文の事前チェックを担うことで役割を明確にするとともに、学生が論文の推敲に際し、主指導教員以外の教員からも意見や助言を得る機会を設けたという点において、一定の評価ができる。		
改善のための提言	自ら改善策に挙げているように、事前チェックの確立に当たっては、「チェックリスト」の作成と普及が有効であろう。また、同チェックにおいて、副指導教員は「評価」しないものの、如何にして「助言・支援」するかに関する役割を強化、明確化することが求められる。		
No		評価基準	教員・教員組織
9	年度末報告	中期目標	②博士後期課程の設置を検討する。博士課程の設置を目指すことで、全教員の研究が活性化することも期待できる。
		年度目標	博士後期課程の設置へ向けての検討を活発に行い、学内の諸手続を進めていく。
		達成指標	設置申請書を完成させる。
		教授会執行部による点検・評価	
		自己評価	S
		理由	2021年度・博士後期課程開設へ向けて、学内における設置準備委員会の立ち上げと開会、文科省への事前相談の実施（2019年12月、2020年1月の2回）、スポーツ健康学研究科事務課および教学企画課の多大な協力による申請書類の完成へと手続を進めることができた。
		改善策	—
		質保証委員会による点検・評価	
所見	2021年度の博士課程開設に向けて、申請書類が完成しているとのことから、達成指標に示された事項を達成されていると判断でき、評価は妥当であると考えられる。		
改善のための提言	申請書類が完成したことを受け、実際の開設へ向けた審査へ手続を進めることになるため、必要に応じて書類内容の修正を行い、不備なく博士課程の開設がなされることを期待する。		
No		評価基準	学生支援
10	中期目標	①外国人留学生に対する支援の充実	
	年度目標	外国人留学生（第1学年：2名）に対する学習支援を行う。	
	達成指標	日本語による論文執筆力等の状況について指導教員から定期的に報告してもらい、場合によっては日本語力を向上するための手立てを講じる。	

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S:さらに改善した、A:従来通り、B:改善していない」を意味する。

	年度末報告	教授会執行部による点検・評価	
		自己評価	B
		理由	留学生（M1・2名）に対して、指導教員はじめ各教員が、ゼミ・授業・修論構想発表会等を通して日本語力の向上に関わっているといえるが、市ヶ谷における「大学院日本語科目（研究科共通科目）」の受講等、目に見える形での日本語力向上策は実施できていない。
		改善策	留学生1名の「授業改善アンケート」によれば、ある授業の良い点や改善点の記入項目において、「毎週のレポートを通して授業の内容を理解しつつ、日本語の書く練習機会も確保されてきた」と記述されていた。したがって、留学生自身はやはり「日本語力向上」を求めている。指導教員によれば日常において段階的に日本語論文執筆指導も行われているとのことであるが、多摩キャンパスにおいて「大学院日本語科目（研究科共通科目）」に相当する授業科目があれば、研究科としても推奨できる。
		質保証委員会による点検・評価	
		所見	留学生の学習支援について、研究科全体として対応している点は評価できる。個々人での対応に留まっていることに鑑みれば、自己評価も妥当であると判断できる。
		改善のための提言	留学生自身の日本語力向上の意向に加え、日本語での授業や発表会等に留学生が対応していくためにも、留学生に対するより一層の日本語教育は重要であると考えられる。多摩キャンパスにおける日本語教育関連共通科目の受講も有益な教育活動ではあるが、開講が未確定な状況であれば、専攻としてより積極的な支援策の策定も検討の余地があると考ええる。
No	評価基準	学生支援	
11	年度末報告	中期目標	②生活相談に組織的に対応する。
		年度目標	学生からの生活相談に対する体制を明確にする。
		達成指標	学生からの相談を受けた場合、直ちに研究科執行部および事務課に連絡するよう教授会で周知徹底する。
		教授会執行部による点検・評価	
		自己評価	A
		理由	2019年度については、学生から執行部への生活面に関する直接の相談は無かった。ただし、教員および学生を通じた各学生の生活面に关わる様子は間接的には把握しているつもりであり、また、奨学金受給学生に対する面談は実施した。
		改善策	執行部が中心となり、学期毎に生活相談会の類を開催する等、学生から親近感を得られるようにした方が良いでしょう。
質保証委員会による点検・評価			
所見	学生からの相談がなかったということで、対応の必要性も生じておらず、また学生の生活面における状況もある程度は把握できているとのことと自己評価も妥当であると考えられる。		
改善のための提言	各学生の生活面の様子を間接的に把握している状況であるということではあるが、複数の相談窓口（複数の教員）を設けたり、定期的な面談を行うなど、より積極的な状況把握と多様で組織的な対応方法の検討を期待したい。		
No	評価基準	社会連携・社会貢献	
12	年度末報告	中期目標	グローバルな視野から社会連携を図り、海外研修等を促進する。
		年度目標	海外研修プログラムの実施内容・方法を検討する。
		達成指標	2019年度において大学院生の海外研修プログラムへの参加を実現する。
		教授会執行部による点検・評価	
		自己評価	A
理由	2019年度において、大学院生1名がスポーツ健康学部の海外研修プログラム（コーチング領域）に参加し、学部生をリードするとともに海外の大学およびスポーツクラブ等との連携を深めた。		

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S:さらに改善した、A:従来通り、B:改善していない」を意味する。

	改善策	大学院生向けの海外研修プログラムの開設も検討課題ではあるが、本研究科は定員が少数であるため現実的ではない。一方では、複数の学生が海外で学会発表を行っており、短期留学等、研究力の向上という視点から海外研修を考える方が有効かもしれない。
質保証委員会による点検・評価		
	所見	希望者が海外での研修に参加していることは評価できるが、大学院生が学部生の学びをリードすることはできたとしても、大学院で求められるレベルの研修が学部の研修プログラムによって達成できたのかという点においては評価が難しい。大学院生の研修として十分な質を担保できる制度の構築が重要であると考え。
	改善のための提言	大学院向けの海外研修制度が現実的ではないならば、国際学会での発表をより促進する、海外から研究者を招聘した講演や短期の研修会の充実等を有効利用した教育も検討の価値があると考え。研究科の定員や予算を踏まえた現実的な目標設定や効率の良い方策の設置が期待される。

【重点目標】

博士後期課程の設置へ向けての検討を活発に行い、学内の諸手続を進めていく。文科省に提出する設置申請書（案）を速やかに作成する。

【年度目標達成状況総括】

今年度の重点目標であった博士後期課程設置へ向けての検討を活発に行い、設置準備委員会の設置をはじめ本研究科事務課および教学企画課の協力を得て、学内の諸手続を進めることができた。一方、現行の修士課程における教育内容・教育方法・学習成果をみた場合、より専門性を高める方向でのカリキュラム改革を行う必要も生じている。また、副指導教員の役割およびコースワークを強化していく中で、学生自身が感じる学習成果としての「論文執筆・完成能力」の獲得には一定の成果を挙げることができた。なお、2019年度の修了生アンケートでは、「本研究科に対する満足度」について81.8%が肯定的回答を行っており（2018年度・大学院全体では89.1%）、「本学大学院を他者に勧めたいか」に対する肯定的回答は63.6%（2018年度・大学院全体では76.4%）とやや低調であるものの、「修了できたことを誇りに思う」および「充実した大学院生活を過ごすことができた」に対する肯定的回答は各々90.9%であり（これらの2項目は2019年度・修了生アンケートからの新設）、開設から4年が経ち、本研究科修士課程も定着してきた感がある。

【2019年度目標の達成状況に関する大学評価】

スポーツ健康学研究科では、博士後期課程設置へ向けて定期的に活発な検討を行い、学内の諸手続を進め申請書類の完成を見たことは開設への着実な前進であり高く評価できる。教育課程・学習成果に関して、全授業科目に対して授業改善アンケートを行うという目標に対して、2019年度は25科目開講中アンケート実施数が前年度から大きく減少しているが、その原因の究明も含め改善を期待したい。また、教育方法の改善策につき執行部は「カリキュラムについて専門性を強める必要がある」とする一方で、質保証委員会は「幅広い知識と教養」をはじめとする諸課題の改善を期待しており、両者の整合と両立の施策が求められよう。修了者アンケートにおいて肯定的回答が多く全体的に向上している。特に、2019年度から実施した修士論文の「事前提出（予備的審査）」において副指導教員による論文チェックを行うことにより、「論文執筆・完成能力」等に対する評価が大幅に向上したことは、新たな取り組みの成果であり高く評価できる。

IV 2020年度中期目標・年度目標

No	評価基準	理念・目的
1	中期目標	変更なし。引き続き、「高度専門的職業人の養成」を掲げる。
	年度目標	—
	達成指標	—
No	評価基準	内部質保証
2	中期目標	教育課程・学習成果、教員組織等を継続的に点検するため、質保証委員会を機能させる。
	年度目標	特に2021年度の新カリキュラム策定へ向けてチェック機能を高める。
	達成指標	新カリキュラム策定の検討会への質保証委員の参画。
No	評価基準	教育課程・学習成果【教育課程・教育内容に関すること】

※注1 回答欄「はいいいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S:さらに改善した、A:従来通り、B:改善していない」を意味する。

3	中期目標	「高度専門的職業人の養成」という理念・目的に対応する教育内容であるかについて検証し、新カリキュラム策定（2021年度以降）を目指す。
	年度目標	2021年度へ向けて「幅広い知識・教養の涵養」に配慮しつつ、「より高度な専門性の追求」を可能とする新カリキュラムの策定を目指す。
	達成指標	「基礎科目」および「展開科目（専門科目）」の内容を具体的に検討し、改善案を作成する。
No	評価基準	教育課程・学習成果【教育方法に関すること】
4	中期目標	①「高度専門的職業人の養成」という理念・目的に対応する教育方法であるかについて検証し、新カリキュラム策定（教職再課程認定のため2021年度以降）を目指す。
	年度目標	2021年度へ向けてよりスリムで効率の良い新カリキュラムの策定を目指す。
	達成指標	「基礎科目」および「展開科目（専門科目）」の編成と実施方法を具体的に検討し、改善案を作成する。
No	評価基準	教育課程・学習成果【教育方法に関すること】
5	中期目標	②アクティブラーニング等、学生の積極的な参加型授業を充実する。
	年度目標	新型コロナウイルスの影響もあり、オンライン（特に双方向型）の授業についてスキルアップを図る。
	達成指標	双方向型オンライン授業等について研究科教員の研修の機会を設ける。
No	評価基準	教育課程・学習成果【学習成果に関すること】
6	中期目標	「高度専門的職業人の養成」という理念・目的を達成する学習成果となっているかを検証するための方法を設定する。
	年度目標	大学評価室による大学院修了生アンケートを用いて本研究科の2020年度修了生に対する調査を行う。
	達成指標	2019年度の結果と照合して変化等をみる。「専門的知識とその応用力」「論文執筆・完成能力」「研究課題の発見、自力で調査、研究する能力」等に着眼し、引き続き、それらに対する肯定的回答率の維持を確認する。
No	評価基準	学生の受け入れ
7	中期目標	着実に入学定員を確保していく。
	年度目標	2021年度入試（2020年度実施）へ向けて広報活動を行い、引き続き定員確保を目指す。
	達成指標	修士課程において定員10名を満たす。なお、博士後期課程が認可されれば、当課程の定員4名を満たす。
No	評価基準	教員・教員組織
8	中期目標	①現行の修士課程（2016年度開設）において、さらに教育研究指導体制を充実する。
	年度目標	前年度に引き続き、修士論文作成プロセスにおける主・副指導教員の役割を強化する。
	達成指標	「論文執筆・完成」に関わる主・副指導教員の役割を強化する一つとして、論文執筆要領やチェックリストを作成し、チェック機能を高める。
No	評価基準	教員・教員組織
9	中期目標	②博士後期課程の設置を検討する。博士課程の設置を目指すことで、全教員の研究が活性化することも期待できる。
	年度目標	文科省による博士後期課程の設置審査結果に迅速に対応する。
	達成指標	博士後期課程の設置認可。
No	評価基準	学生支援
10	中期目標	①外国人留学生に対する支援の充実
	年度目標	外国人留学生（第2学年：2名、第1学年：2名）に対する学習支援を行う。
	達成指標	日本語能力向上について、指導教員による日常の指導はもとより、多摩キャンパスの日本語共通科目の受講やチューター制度の活用を薦める。
No	評価基準	学生支援
11	中期目標	②生活相談に組織的に対応する。
	年度目標	生活面に関する状況を教員側から積極的に把握する。

※注1 回答欄「はいいいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S:さらに改善した、A:従来通り、B:改善していない」を意味する。

	達成指標	学習支援システム等を活用したオンラインでの生活相談に執行部は取り組む。
No	評価基準	社会連携・社会貢献
12	中期目標	グローバルな視野から社会連携を図り、海外研修等を促進する。
	年度目標	大学院生向けの海外研修プログラムの開設も検討してきたが現実的ではない。一方で、これまで複数の院生が海外で学会発表を行う実情があり、研究力の向上と社会連携という視点から再検討したい。
	達成指標	海外の大学から研究者を招聘し、研究状況等を知るための講演会を行う。
<p>【重点目標】</p> <p>昨年度は、重点目標であった博士後期課程設置の準備として、設置準備委員会の設置をはじめ本学事務部の協力を得て学内の諸手続を進め、2020年3月に文科省へ認可申請書類を提出することができた。今年度は、5月末に出される文科省の設置審査結果（第1次）に迅速な対応を行い、2021年度の開設に漕ぎ着けたい。</p> <p>【目標を達成するための施策等】</p> <p>博士後期課程設置に伴う学則の改正等、学内の諸手続はほぼ終了している。文科省の設置審査結果における指摘次第であるが、どのような角度から指摘を受けても対応できるよう準備したい。</p>		

【2020年度中期目標・年度目標に関する大学評価】

スポーツ健康学研究科における2020年度中期目標・年度目標は昨年までの課題を具体的に受け継いで達成が期待されるものであり適切である。「幅広い知識・教養の涵養」に配慮しつつ、「より高度な専門性の追求」を可能とする新カリキュラムの策定するという両立が難しい目標をあげられており、達成指標として「基礎科目」および「展開科目（専門科目）」の内容を具体的に検討し改善案を作成するとある。取り組みの成果を期待したい。教員・教員組織について、博士課程の設置を目指すことで全教員の研究の活性化させることを目標として掲げていることはきわめて具体的であり期待したい。

【大学評価総評】

スポーツ健康学研究科の自己点検・評価は、適正に実施されていると評価できる。設置から5年目を迎えた2021年の博士後期課程設置に向けて準備を進めており順調に推移している。2019年度の修了生の「論文執筆・完成能力」に対する満足度が大きく改善したことは特筆に値する。2年間で4回の修士論文成果発表会が全教員の参加を原則とする中で実施され、充実した研究指導が行われている。2019年度に修士論文最終提出の約1ヶ月前に主・副指導教員による論文内容のチェックを受ける体制がとられたことは評価できる。2年間の全体的な指導計画の中でこの制度が適切に位置付けられ運営されることを望みたい。2020年度の年度目標に、「幅広い知識・教養の涵養」に配慮しつつ、「より高度な専門性の追求」を可能とする新カリキュラムの策定を目指し、達成指標に「基礎科目」および「展開科（専門科目）」の内容を具体的に検討し改善案を作成するとあることは評価できる。最後に、スポーツ健康学研究科博士後期課程の設置が成功裏に認可され、新たな研究拠点となることを期待したい。

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S:さらに改善した、A:従来通り、B:改善していない」を意味する。